

日本簿記学会ニュース

No. 73:12 / 2024

《大会・部会の経過報告》

第40回全国大会は2024年8月30日(金)から9月1日(日)に神戸大学(準備委員長:清水泰洋氏)、第40回関東部会は2024年6月15日(土)に法政大学(準備委員長:坂上 学氏)、第40回関西部会は2024年5月25日(土)に愛知学院大学(準備委員長:西海 学氏)を主催校として各々開催されました。詳しい内容は本紙大会・部会記をご覧ください。

《大会・部会・コンファレンスのご案内》

第41回関西部会は2025年5月に西南学院大学にて、第41回関東部会は2025年6月に北海道大学にて、第41回全国大会は2025年8月23日(土)から25日(月)に東洋大学にて開催される予定です。詳細ならびにコンファレンスにつきましては、学会ホームページで随時公開してまいります。

《第40回全国大会正会員出席状況》

第40回全国大会への正会員の出席者の状況は以下の通りでした。

	全 体	大学関係者	高等学校	専門学校	職業会計人	その他
参加者数	184名	163名	8名	0名	9名	4名
比 率	100.00%	88.59%	4.35%	0.00%	4.89%	2.17%

《役員選挙・役割決定について》

日本簿記学会第40回全国大会において、新役員が次のように決定いたしました(五十音順)。

会 長:橋本武久(京都産業大学)

副会長:梅原秀継(明治大学) 溝上達也(松山大学)

理 事:

【大学関係】 石原裕也(専修大学) 研究 石光 裕(京都産業大学) 会務・学会ニュース
工藤栄一郎(西南学院大学) ホームページ
清水泰洋(神戸大学) ホームページ
原 俊雄(横浜国立大学) 大会・部会 菱山 淳(専修大学) 学会誌
兵頭和花子(大阪経済大学) 大会・部会 山田康裕(立教大学) 研究
吉田智也(中央大学) 会務 渡邊雅雄(明治大学) 学会誌

【高校関係】 峯 正哉(徳島商業高等学校) 会員

【専門学校関係】 鈴木一樹(学校法人北杜学園) 会員

【職業会計人関係】 北村信彦(北村信彦会計事務所) 会計

監 事:浦崎直浩(近畿大学) 坂上 学(法政大学)

幹 事:金子友裕(東洋大学) 小阪敬志(日本大学) 澤登千恵(大阪産業大学) 塚原 慎(駒澤大学)
中溝晃介(松山大学) 松下真也(京都産業大学) 村上翔一(敬愛大学)

なお、会長メッセージは学会ホームページに掲載しております。

《ホームページ委員会》

ホームページ委員会が下記の通り決定いたしました。

委員長：清水泰洋（神戸大学）

委員：工藤栄一郎（西南学院大学） 塚原 慎（駒澤大学） 中溝晃介（松山大学）

《学会賞審査委員会》

学会賞審査委員会が下記の通り決定いたしました。

委員長：原 俊雄（横浜国立大学）

委員：大学 清水泰洋（神戸大学） 吉田智也（中央大学）

高校・専門学校 渡部浩一（川口市立川口総合高等学校）

職業会計人・その他 加藤大吾（加藤大吾公認会計士税理士事務所）

《学会誌編集委員会》

学会誌編集委員会が下記の通り決定いたしました。

委員長：菱山 淳（専修大学）

委員：市川紀子（駿河台大学） 小澤康裕（立教大学） 川島健司（法政大学） 杉田武志（大阪経済大学）

中村亮介（筑波大学） 林 健治（日本大学） 渡邊雅雄（明治大学）

《令和7・8年度研究部会の募集》

令和7・8年度の簿記理論研究部会、簿記教育研究部会、簿記実務研究部会を下記の通り募集いたします。申し出は、研究テーマ・メンバーを明記の上、事務局宛にお願いいたします。締切は、令和7年3月31日です。

(1)研究期間は、第41回全国大会（令和7年）会員総会承認から2年です。

(2)研究成果の報告は、1年経過後の第42回全国大会（令和8年）における中間報告および第43回全国大会（令和9年）における最終報告の2回となります。

(3)研究成果につきましては冊子等を作成いただきます。

(4)研究部会費は1部会200,000円（年間）を予定しています。

(5)研究部会メンバーは当学会会員とします。

(6)研究部会メンバーの人数に制限はありません。

《令和6年度日本簿記学会学会賞および奨励賞について》

令和6年度の日本簿記学会学会賞および奨励賞は、学会賞審査委員会（委員長：橋本武久，委員：原 俊雄，清水泰洋，峯 正哉，山口峰男）における選考とその結果報告を受けて、理事会において次のように決定した。

学会賞：田中孝治『古代・中世帳合法の研究』（森山書店，2023年9月）

奨励賞：授賞対象なし

【学会賞講評】

受賞作：田中孝治『古代・中世帳合法の研究』（森山書店，2023年9月）

本書は、著者の前著『江戸時代帳合法成立史の研究—和式会計のルーツを探求する—』（森山書店，2014年7月）の続編にあたる研究であり、前著で示された江戸時代の帳合法の起源が、わが国の中世・古代、そして、東アジアにあるとする仮説を検証しようとしたものである。

そこで本書では、わが国固有の帳合法の発達史を、膨大な一次資料を基に包括的かつ緻密に論じた上で、

東アジア諸国と比較することを通して、わが国固有簿記の特徴を明らかにしている。また、会計学、歴史学、仏教学など幅広い学問分野の知見を駆使しており、わが国固有の簿記の発達史に関する研究を前進させ、東アジア諸国の簿記に関する研究に新たな視点を与えている。さらに、本書で参照・引用されている文献のリストが、今後の研究者にとって明確な道標となる点も大きな貢献といえる。

もちろん、本書の分析については、その背景に対してより詳細な分析を行うべきではなかったか、その方がより深い洞察を行い得たのではないかといった見解もあったが、これらは審査委員の望蜀の嘆であり、本書の評価をいささかも損なうものではない。

このように本書は、わが国固有の帳合の特徴とその起源を明らかにしようとした優れた研究書であり、わが国簿記学の発展への貢献度も非常に高いことから、審査委員一同は、本書が令和6年度日本簿記学会学会賞にふさわしい作品であると判断した。

《日本簿記学会学会賞審査委員会からのお願い》

会員の皆様から学会賞候補にふさわしい著書等のご推薦をお願いいたします。推薦の手続等については、学会ホームページをご確認ください。また、推薦書籍等については5部ご提出ください。

日本簿記学会学会賞審査委員会

《全国大会記》

日本簿記学会第40回全国大会記

神戸大学
準備委員長 清水泰洋

日本簿記学会第40回全国大会は、8月30日(金)～9月1日(日)の3日間にわたり、神戸大学を大会校として開催された。当初は、懇親会を含め、全面的に対面での開催を予定しており、プログラムにも報告・討議の会場が示されていた。しかしながら、8月22日に台風10号が発生し、広範囲に雨風による多大な影響が発生した。台風発生当初の予報では開催に問題はないと期待されたが、台風の移動速度が遅く、対応を余儀なくされた。26日には開催方法の変更の可能性がある旨を、27日に全面オンライン開催へと変更する旨を決定し、学会及び大会のウェブサイトにて掲示した。会議、講演、報告・討論、そして理事選挙を含めた全日程がオンラインに変更され、対面で予定されていた懇親会は残念ながらキャンセルとなった。

大会第1日の8月30日には、選挙管理委員会、理事会が開催された。学会賞審査委員会は事前に開催され、その結果が理事会に報告された。

大会第2日の8月31日には、まず高校簿記教育懇談会が開催され、峯正哉氏(徳島商業高等学校)の司会のもとで、西澤章裕氏による「DX時代の商業人を育てる」というテーマで講演が行われた。午後からは、会員総会が行われ、その中で学会賞の授賞対象作の選考結果と受賞理由が報告され、オンラインではあるが受賞作の作者である田中孝治氏への賞状の読み上げが行われた。会員総会の後、研究部会報告が行われた。石原裕也氏(専修大学)の司会のもとで、簿記理論研究部会「アンケート調査に基づく現代簿記論の研究」(部会長:市川紀子氏(駿河台大学))、簿記教育研究部会「『高等学校学習指導要領』の趣旨に基づく簿記教育の研究—「見方・考え方」を働かせた円滑な学びの過程の実現による「資質・能力」の育成—」(部会長:江頭彰氏(福岡大学))、簿記実務研究部会「検定簿記と会計実務の関連性に関する研究」(部会長:加藤大吾氏(加藤大吾公認会計士事務所))による中間報告が行われた。

引き続き、記念講演会と統一論題報告が行われた。記念講演は、中野常男氏(神戸大学名誉教授)の司会のもとで、松井洋子氏(東京大学名誉教授)による「オランダ東インド会社日本商館とその文書—日記・書

翰控簿・会計帳簿一」という論題で行われた。日本史と世界史が、オランダ東インド会社社員の手による帳簿を通じてつながっていることを示す貴重なご講演であった。統一論題は、吉田智也氏（中央大学）を座長にお迎えし、「簿記の外延を考える」を論題として、報告が行われた。報告は、それぞれ篠藤涼子氏（大阪経済大学）の「家計簿に見る記帳内容の展開」、竹中徹氏（京都文教大学）の「簿記教育の可能性：複式簿記相対化の視点から」、板橋雄大氏（東京経済大学）「ブロックチェーン時代の簿記システム」、小澤康裕氏（立教大学）の「デジタル時代の財務諸表監査と会計記録」という論題で行われた。

大会第3日には、2会場で合計7の自由論題報告が行われた。第1会場では、岩崎勇氏（大阪商業大学）の司会により、石川業氏（小樽商科大学）の「日本企業における複式簿記普及の経路」、渡邊圭氏（千葉商科大学）の「ICTを利用した簿記教育の事例研究—学校行事の事例を中心に—」の2報告、また田代樹彦氏（名城大学）の司会により、海住信行氏（三重県立松阪商業高等学校）の「日本昔話風寸劇で黒字倒産を語る—班活動によりコンピテンシーの向上を目指して—」、川島健司氏（法政大学）の「なぜ「内部留保＝現金保有高」という誤解は払拭できないのか—簿記教育における利益剰余金の説明方法に関する一考察」の2報告が行われた。第2会場では、石光裕氏（京都産業大学）の司会により、土井貴之氏（中村学園大学）の「近代酒造業における本社工場会計制度—最新醸造簿記（1920）と灘酒造家の一次史料より—」の1報告、溝上達也氏（松山大学）の司会

により木村太一氏（慶應義塾大学）の「複式簿記における資本の意義—一致の原則に着目した検討」、竹島貞治氏（金沢大学）の「継続記録法と棚卸計算法の通説的説明の検討」の2報告が行われた。その後、休憩を挟んで統一論題討議が行われた。座長の吉田智也氏のもとで、4人の報告者に対する質問と返答、そしてそれを踏まえて活発な議論が行われ、散会となった。オンラインでの開催とはなったが、報告や討議の活発さは、例年通りであったと感じている。

開催されていれば5年ぶりとなった懇親会の場で、また会場で先生方にお目にかかる機会を得られなかったことは非常に残念である。開催方法の変更により全員の先生に報告をいただくことが不可能となり、また対面での討論が適わなかったことは、気象によるものとはいえ、大変申し訳なく感じている。荒天の中でご参加いただいた参加者もおられると思われ、大会にご参加いただいた先生方に厚く御礼申し上げる。

最後に、急遽の開催方式変更にあたり、実に多くの方々から多大なご支援をいただいた。直前にもかかわらず研修開催方法の変更を承認いただいた、日本税理士会連合会及び日本公認会計士協会に感謝申し上げます。また、泉宏之会長の判断のもと、迅速にご対応いただいた倉田幸路副会長（選挙管理委員長）、橋本武久理事、原俊雄理事、石光裕理事に、そして、開催方法変更に伴う諸実務に携わっていただいた中溝晃介幹事、松下真也幹事、小阪敬志幹事、吉田智也幹事、安間陽加幹事に改めて御礼を申し上げて大会報告を終えることとしたい。

《関西部会記》

日本簿記学会第40回関西部会記

大阪経済大学
部会参加者 杉田武志

日本簿記学会第40回関西部会は、2024年5月25日（土）に愛知学院大学名城公園キャンパスにて13時より開催された。参加者総数は、会員・非会員を含め、40名であった。

最初に準備委員長の西海学氏（愛知学院大学）、会長の泉宏之氏（横浜国立大学）より挨拶が行われ、それから自由論題として3つの題目が報告された（各報告時間は40分、コメント・質疑応答の時間は10分であった）。その後、懇親会が同大学キャンパス内のくすのきテラス1階で開催された。

第1報告では、石光裕氏（京都産業大学）の司会のもと、工藤栄一郎氏（西南学院大学）による「シャ

アップ勧告・青色申告制度導入にみる簿記制度の権力性」が報告された。

工藤氏の報告では、簿記の社会的な作用（報告の基礎とするセオリー）について、「簿記はこの経済主体の合理化のためではなく、社会的規模での「統治のテクノロジー」として機能することを期待されて構築された制度ではないか？」というリサーチクエスションの説明が行われるとともに、第2次世界大戦後の税制改革である「シャープ勧告—青色申告制度」が観察と検討の対象とされた。一連の考察に基づき、中小企業に対する簿記実践啓蒙普及活動は戦前（昭和初期）においても見られ、その背景にあったのは世界恐慌の影響による経営困難への対策であったことが述べられたが、シャープ勧告—青申における簿記実践普及の意味はこれらとは異なることも指摘された。最後に、簿記は権力による統治のための実践であることが、氏による一連の考察や「令和時代における権力と簿記」などの具体的な事例を基にして説明された。

第2報告では、田代樹彦氏（名城大学）の司会のもと、西舘司氏（愛知学院大学）による「費用先行型損益計算書を導く資本在高法の勘定理論—ビーダーマン学説に学ぶ—」の報告が行われた。西舘氏の報告では、資本在高法の勘定理論によって、費用先行型の損益計算書を導くことができるのか、という問題意識のもと、ビーダーマン学説を取り上げ、詳細な検討に基づく報告が行われた。考察の結果、同勘定理論における簿記の対象が営利経済のために資本提供者から任意の処理を任された資本（総資本）であることが言及された。さらに、その資本在高の増加（入）と減少（出）を、一方において経営の立場から財産として、他方において資本提供者の立場から資本として二重に記録することに、複式簿記機構の基本軸を見出していることも説明された。最終的に「企業活動の結果（利益や終末資本）はその活動をすべて終了した時点で確定できるため、期間を

区切って行う決算は、その仮想として説明される。つまり、決算では経営価値の期末在高を全面的に現金化（製品化して販売）するという仮想のもと、その在高（費用）に見合う収益か原価で認識されるという説明がなされる。ここに費用先行型の損益計算書を導く論理を見出すことができる」と結論が述べられた。

第3報告では、溝上達也氏（松山大学）の司会のもと、児島記代氏（金沢学院大学）による「簿記情報の性質に関する一考察—多式簿記再構成の試み—」の報告が行われた。児島氏の報告は、他勘定振替高を例にとり、誤答が発生するメカニズムについて分析した当学会第39回関西西部会における報告内容を発展させたものであった。氏の報告では、他勘定振替高の会計学辞典等をレビューすることにより、概念エラーが発生している可能性が指摘された。あわせて、概念エラーは簿記教育等を通じて再生産されていると論じるとともに、概念エラーの発生原因についても説明が行われた。最後に、簿記教育の問題点（与えられた数字を使用したパターン練習に終始すること、実務的な判断力を養えないこと）と概念エラーの解決策として、ケースメソッド型教育（実務と近い状況で教える簿記教育、企業実態を理解できる形式）について言及がなされた。

各報告に対して、フロアーより多くのコメント・質問が寄せられ、活発な議論がなされ、簿記理論、簿記実務、簿記教育を考える上で大変有意義な報告会の場となった。

また、対面による懇親会が2019年以来5年ぶりに開催された。久しぶりの懇親会ということもあり、多くの会員が参加され、活発な意見交換も行われ、盛況のうちに終了となった。

（なお、本学会記は、準備委員会の業務多忙により、学会からの依頼で杉田先生にご執筆いただきました。）

日本簿記学会第40回関東部会記

法政大学
準備委員長 坂上 学

2024年6月15日（土）に、法政大学において日本簿記学会第40回関東部会（準備委員長：坂上学，準備委員：神谷健司，川島健司）が開催された。事前の参加登録者は77名で、当日参加申込み含めると81名の参加者であった。

今回の関東部会を開催するにあたり、統一論題として何を取り上げるべきかアイデアが浮かばずに悩んだが、部会開催の準備を始めた2023年10月は、ちょうどインボイス制度が導入された直後ということもあり、インボイス制度の導入が簿記会計の実務や教育にどのような影響を及ぼすのかについて議論してみてもどうか、との発想を得た。インボイス制度については、簿記会計処理について十分に議論がなされているとは言い難かったからだ。

統一論題の方向性が決まったので、続いて登壇者の人選に進んだ。まず、簿記会計と税務の両方に造詣の深い金子友裕氏（東洋大学）に座長就任を打診したところ、すぐに快諾していただいた。また簿記実務と簿記教育に精通している加藤大吾氏（公認会計士・税理士）と、長らく簿記会計実務に携わり簿記教育の最前線に立たれている中野貴元氏（全国経理教育協会）のお二人にお声がけをし、神楽坂にある駒安という居酒屋で、私と座長を含めた4名でインボイス制度と簿記会計処理について議論を重ねた結果、インボイス制度の税法上の考え方、実務上の簿記処理の多様性、会計管理上の問題、等々の論点が浮かび上がった。実務上の多様性に関する議論については加藤大吾氏（公認会計士・税理士）にさせていただくことをその場で了承してもらった。税法上の論点については、インボイス制度の立ち上げにもかかわっていた栗原克文氏（筑波大学）に依頼することにした。会計管理上の論点については金子善行氏（帝京大学）に依頼することにした。ここでの議論は、まさに今回の関東部会の学術委員会であり、

議論に参加していただいた各氏には、ここに記して感謝申し上げる次第である。

幸いにして栗原氏と金子氏には登壇者として快諾していただけたが、ここで一つ問題が生じるようになった。栗原氏は税法学者であり簿記学会の会員ではなかったため、大会・部会の統一論題セッションに登壇するには、別途理事会の承認が必要だったのだ。理事会に打診したところ、栗原氏に依頼する特段の理由があるとのことでした承していただいた。泉会長をはじめ理事会の方々には、英断をしていただいたことに感謝申し上げる次第である。

結果として、統一論題報告セッションは、以下のような内容となった。

統一論題報告「インボイス制度と簿記」

座長解題：金子友裕氏（東洋大学）

第1報告：栗原克文氏（筑波大学）

「インボイス制度の意義と今後の課題」

第2報告：加藤大吾氏（公認会計士・税理士）

「インボイス制度が消費税の会計処理に与える影響」

第3報告：金子善行氏（帝京大学）

「インボイス制度と管理簿記」

統一論題とは別に、倉田幸路氏（立教大学名誉教授）による記念講演を企画した。論題は「これまでの研究を振り返って」で、長年にわたり多方面にわたって研究をされてきた倉田先生に、これまでの研究を振り返りながら簿記会計研究の展望についてお話をいただいた。

最後に、懇親会についても言及しておきたい。今回の懇親会では「ワインと食でめぐる複式簿記の起源」をテーマとし、イタリアの豊かな文化と歴史に触れる内容の展示もあわせて行った。複式簿記の発祥地には諸説あるが、なかでも有力とされるジェノヴァ、トスカーナ、ヴェネチアの各地域のワインの魅力を存分に味わっていただけるよう、準備委員でもあり日本ソムリエ協会認定ワインエキスパートで

もある川島健司氏のセレクトした各産地のイタリアワインを賞味しながら、それぞれの起源説に思いを馳せていただいた。また能登半島の震災に対する復興支援もかねて、「能登初桜+天狗舞」をはじめとする上質の日本酒を用意し賞味いただいた。料理は、

さくらテラス・イタリアンの名店「ルッコリーナ」によるカップオードブルと、シェフがその場で作る出来立てパスタが振る舞われた。盛況のうちに関東部会のすべてのプログラムを終えることができたことは幸いであった。

令和5年8月25日以降、令和6年8月29日までに申し込まれ、6月2日および8月30日開催の理事会で入会が承認された新会員は以下の通りです。

入会会員名簿

(名簿の番号は会員番号)

番号	氏名	所属機関	番号	氏名	所属機関
2024-001	李 焱	駒 澤 大 学	2024-009	西森 亮太	新潟青陵大学短期大学部
2024-002	平岡 憲道	税 理 士	2024-010	渡邊 泰淳	渡邊泰淳税理士事務所
2024-003	雲居 陳之	新 潟 産 業 大 学	2024-011	三ツ間千恵子	栃木県立足利清風高等学校
2024-004	松本 真季	有限責任監査法人トーマツ	2024-012	伊藤 壽章	神奈川県立商工高等学校
2024-005	内山 敏昭	茨城県立水戸商業高等学校	2024-013	木村 定信	千葉県立千葉商業高等学校
2024-006	王 琳	広東外語外貿大学会計学院	〈準会員〉		
2024-007	河邊 丹理	豊 橋 創 造 大 学	2024-014	中田 彩	関西学院大学経営戦略研究科
2024-008	池村 恵一	東 洋 大 学			

編集後記

当初対面での実施が予定されていた全国大会は、台風が日本列島を横断した影響により、オンラインに変更となりました。また、同大会では役員選挙を予定していた関係上、役員選挙も急遽オンラインでの実施となりました。迅速に対応していただいた準備委員長をはじめとした開催校の先生方には感謝申し上げます。この結果、滞りなく新体制を迎えることができました。橋本新会長のもと、学会の発展に貢献していく所存です。

(金子・小阪・澤登・塚原・中溝・松下・村上)

発行所
編集兼
発行人

日本簿記学会事務局

事務連絡所

〒101-0021 東京都千代田区外神田 5-1-15
株式会社白桃書房

e-mail boki@hakutou.co.jp

URL <https://www.hakutou.co.jp/boki/>